《書評》

Нина Ивановна Дубинина, *Дальний Восток Яна Гамарника*, Хабаровская Краевая Типография, Хабаровск, 2011. 432с.

Kraevaia Tipografiia, Khabarovsk, 2011. 432p.

寺山　恭輔*

Book Review: Nina Ivanovna Dubinina, Dali'nii Vostok Iana Gamarnika, Khabarovskaia

TERAYAMA Kyosuke

本書の著者ドゥビーニナ氏はプリアムール総督 3 人の評伝を執筆した。プリアムール総督府は 1884 年に設置され 1917 年のロシア革命までに 8 人の総督が存在した。彼女の評伝は第三代グロデコフ（1843–1913）、第七代ウンテルベルゲル（1842–1921）、第八代ゴンダッチ（1860–1947）の 3 人についてのものである。プリアムール総督府は今日のロシア極東地方と重なる部分が多いため、評者はこの三部作の内容を詳しく紹介する作業を通じて「ロシアの極東地方」の形成過程をまとめる作業を行った（寺山恭輔「ロシア極東の形成──N.I. ドゥビーニナ著『プリアムール総督』三部作より──」『東北アジア　アラカルト』第 23 号（2010 年））。

今回紹介するのは彼女の最新作たるヤン・ガマルニクの伝記『ヤン・ガマルニクの極東』である。ガマルニクも極東と関係の深い人物で、1937 年に自殺するまでスターリンの統治体制を支えた。上記三部作同様、対象に対する著者の敬意にあふれた著作である。番号のない各章に評者が便宜的に番号を付し、各章の内容についてまとめると以下の通りである。序文のあと、第一章は生誕から極東へ赴任するまでの活動、第二章はダリレフコム（極東革命委員会）議長としてのガマルニクの活動、第三章は 1925 年のガマルニクの活動、第四章は極東州の少数民族大会、第五章は極東執行委員会第一議長、全連邦共産党（ボリシェヴィキ）極東地方委員会書記としてのガマルニクの活動、第六章は陸海軍事人民委員代理としての活動、第七章は極東地方への党全権代表としての活動、第八章は 1937 年の自殺に至るまでの経緯、第九章は残された友人の悲劇的

*東北大学東北アジア研究センター

な運命を描き、最後に結論が導かれている。以下に各章ごとに簡単に内容を紹介していくことにしたい。

序文で研究史について触れている。ガマルニクについては他の粛清関係者同様、長い間言及されず、1950 年代後半から発表され出した論文、記事は約 50 を数えるものの、ウクライナや軍での活動に比べ、極東での活動についての言及は少ない。そこで著者は極東における彼の活動、ソ連時代の地方統治の定着と展開、中央と地方権力の相互関係に関する考察を目標に掲げている。著者自身の人生の最初の数年がガマルニクの人生の最後の数年と重なるが、ヤロスラヴリ地方の農村出身でまさにガマルニクの同時代人だった著者の両親ら戦間期を生きたすべてのソ連の人々に対する感謝の記憶の表現として本書が捧げられている。

第一章。ガマルニクは 1894 年 5 月 21 日ジトーミルに生まれたユダヤ人で、オデッサのギムナジウムを終え、ペテルブルグの精神神経学学院で 1 年、キエフ大学法学部で 2 年学んだ。1916 年にボリシェヴィキに加わり、1917 年にはキエフの党書記となり、内戦期にはウクライナで活動した。ソ連邦成立直後の 1923 年初頭、キエフ県ソヴィエト執行委員会議長在任中に党中央委員会〔以下、断りなく党と記す〕の指示で極東に向かった。チタで党中央委員会ダリビューロー（極東ビューロー）書記クビャク、ダリレフコム議長コボゼフの説明を受けてウラジオストックに向かった（当時中国人、朝鮮人を除き約 4,000 人の外国人が登録）。1923 年 3 月 10 日ウラジオストックでの第 1 回沿海（プリモーリエ）県ソヴィエト大会で、ガマルニクは沿海県執行委員会議長に選出された。各地の反ソ反乱を鎮圧しつつ 1923 年夏には極東州が形成された（プリバイカル、ザバイカル、アムール、プリアムール、プリモーリエ、カムチャツカ県で形成）がネップは波及せず、経済的に中央と一体化していなかった。中小企業の多くを中国人が経営し、貿易も私企業中心で国と協同組合は 35% を占めるにすぎなかった。ガマルニクは雑誌『沿海の経済生活』（1923 年に第 1 号、24 年までに 8 号刊行）の編集長も務め、県内の視察で農業が主要産業だと確信した。統計によれば 5 年間に農業人口は 7 万 5,000 人（約 22%）増加し、ウクライナからの農業移民が多かった。1924 年 2 月 1 日には武器登録についてのガマルニク署名の新聞記事も出た。失業（1923 年春ウラジオストックで 17,600 人）、孤児（1924 年に 1,177 人）、文盲対策など社会問題にも取り組んだ。初等学校や第二初頭学校（7 年制）の数ではモスクワにも劣っていなかったが、著者は学校網の大部分が革命前に構築されたことをガマルニクが言及し忘れていると鋭く指摘している。1923 年半ばのコボゼフの中央への召喚後、後任が任務を遂行できなかったため、1924 年 6 月に若干 30 歳でダリレフコム議長という極東トップの地位に就任した。

第二章。1922 年 11 月、極東全体の統括に不便という理由で極東州の中心はチタからハバロフスクに移された。大戦前の 5 万人から 1924 年には 3.4 万人にまで人口が減少していた当時のハバロフスクに過去の面影はなかった。1925 年 1 月の日ソ基本条約で同年 5 月までの北サハリンからの日本軍撤退が決まり、ガマルニクは対日交渉にも参加した。ダリビューローは北サハリン接収委員会を設置し、様々な課題に対処した。極東コンセッション委員会委員長としてガマルニクはサハリン島に関する研究の必要性をチチェーリン外務人民委員に訴えた。北サハリン接収委

員会は 3 月にソ連の状況を知らない現地住民（5,000 人）に事情を説明した。1925 年 5 月 14 日にソ連の接収委員会と日本の派遣軍が、撤退とソ連権力樹立に関する協定を締結し 9 月には日本の領事も来訪した。ガマルニクは中野正剛（矯正労働システムに関心）と会見し、松方幸次郎（ウスリー鉄道への技術部品提供に関する協定を締結）からは日本へ招聘されたが、モスクワは地方幹部の外国との接触を奨励していなかった。1925 年 9 月に大阪でロシアの農工製品の展示会が開かれ、新聞『太平洋の星』にも、シベリアへの日本人移民を提案した後藤新平の記事など日本に関連した記事も掲載された。

一方で中ソ協定（1924 年 5 月 31 日）と、張作霖との奉ソ協定（同年 9 月 20 日）も極東地域の安定化に貢献した。共同管理下の中東鉄道のソ連側行政はダリレフコムの管轄下にあった。駐中国ソ連全権代表のカラハンは北京からスターリンにガマルニクを高く評価する書簡を送った。ガマルニクは県、郡、郷のソヴィエト執行委員会、村ソヴィエトに数百人の人材を派遣してソヴィエト権力を強化し、定例会議で各地の執行委員会の仕事を検討し、決定は通常『太平洋の星』紙に掲載された。諸県の執行委員会書記や下部機関の長が集まった州の第一回協議会（1925 年 6 月）でガマルニクは、革命的法秩序の厳守、県と郡、郷の関係強化を求めた。犯罪と闘争するための検察機関の基本課題を検討し（1924 年 10 月）、村落における革命的法秩序の違反に注意を喚起した（1925 年 7 月、ダリレフコム総会）。ダリレフコムの存在期間中 3 回（1923, 1924, 1925 年）のソヴィエト選挙の実施に注力した。1925 年には村ソヴィエトに前回（14,221 人）を上回る 19,600 人が選出されたことをガマルニクは評価した。「村落に顔を向けよ」というスローガンが掲げられた。

経済分野ではダリプランが提出した漁業発展（オホーツク・カムチャツカ漁業株式会社）、金産業発展（ダリゾーロト）のための方策を決定した。布告「極東州における農業について」（1924 年 8 月）を採択し、州党協議会（1924 年 9 月）では極東の商業について種々の問題を取り上げた。貿易の国家独占による満州からの密輸増大（1913 年の 1% から 1924–25 年の 12% へ）に対しソ連商品の値下げ、国境における特典価格を提案した。「文盲をなくせ」州ビューローの議長にも就任し、1924 年の極東州第 1 回スポーツオリンピックを極東州体育ソヴィエト議長として支援した。革命前に権威があったロシア地理学協会極東支部の復活にもガマルニクは直接関係を持っていた。1925 年には 1923–24 年のダリレフコムと極東経済評議会の活動をまとめた書籍も出版した。

第三章。1925 年に焦点をあて、ソ連極東の発展の展望について中央のゴスプランの計画にダリレフコムが反対したことを著者は重視している。経済協議会を主宰していたガマルニクはツェリシチェフ、マモノフ、スタリコフら有能な幹部に極東独自の発展計画を策定させた。最大の論点は極東にザバイカルを加えて一体的な発展を目指す点にあった。満州でソ日米の利害が交錯し、太平洋地域の重要性がますます増大するという国際状況を考慮し、極東はソ連の経済的・政治的橋頭保になるべきという主張である。162.58 万人の人口（1923 年、うち農村 119.48 万人、都市 43.1 万人）が、1926 年のソ連初の国勢調査で 181.8 万人へと 20 万増加していた。最後のプリアムール総督ゴンダッチが 1910–11 年に派遣したアムール鉄道沿線開発のための大調査団によ

る 30 巻以上の報告書について前著で言及していた著者は、ガマルニクらがこの成果に依拠して極東の発展計画を立案したのだと述べ、帝政時代からの事業の継続という側面を示唆している。『極東の経済生活』（1925 年 9 月）誌への論文でガマルニクは、農民の植民のみならず工場建設の必要性を訴え、極東への植民のため 10 年で約 3 億ルーブルの投資を国に求めた。25 年間に人口が 200 万から 1,300 万に急増した満州北部に対抗すべくバイカル湖までの一体的な強力な単位を求めた。1925–35 年の 10 年で 2 億 5,600 万ルーブルの投資を計画した（輸送インフラに 1 億 6,400 万、農業に 5,440 万、工業に 4,840 万ルーブルを予定）。第 7 回地方党協議会（1925 年 11 月）でダリビューローに代えて極東地方党委員会が設置されガマルニクもその書記に選出された。この場で第 14 回党大会（「工業化の大会」）代議員にも選出され、大会でガマルニクは党中央委員会候補に選出された。続く 1926 年 1 月の全連邦中央執行委員会幹部会で極東州とほぼ同じ領域をカバーする極東地方（9 管区、75 地区から構成。県、郡、郷は廃止）が形成された。1926 年 3 月半ばの第 1 回地方ソヴィエト大会でダリレフコムが極東地方執行委員会へ移行したが、その前に 30 人以上の執筆者を集めて『極東地方におけるソヴィエト建設の 3 年』が刊行されたがガマルニクが総括的な文章を書いた。依然として 1913 年の水準に回復していない経済、自給できず常に外部からの食料供給に頼る農業、密輸問題、輸送の重要性を指摘した。外貨流通が 3 分の 1 を占める財政については、銀行数やソ連資本の増大に前進を見てとった。68 のコンセッション事業計画のうち 11 事業が承認されたこと、文化建設についても触れた。ロシア憲法に則り 75 人の極東地方執行委員会が形成され、続く 3 月 23 日の第 1 回極東地方執行委員会総会で 11 人からなる幹部会が選出された。

第四章。1926 年国勢調査で極東人口のわずか 2%（39,088 人）を占めるにすぎない少数民族に関して、すでに 20 世紀初頭アルセーニエフらが絶滅を警告していたが、8 年間の戦争、略奪、搾取、密輸によるアルコール消費等で出生率が低下した。15 カ所（アムールに 3、沿海に 11、ザバイカルに 1）の少数民族地区ではその自治組織とソヴィエト組織の対立も見られた。全連邦中央執行委員会に附属し、スミドヴィチが指導する北部辺境諸民族支援委員会（通称北方委員会）が 1924 年に設置されていたが、1925 年 2 月 23 日にはダリレフコムにもガマルニクをトップに北部辺境民族支援委員会が作られた。これを受けてハバロフスクでの少数民族の大会（1925 年 6 月 15 日–23 日）にはオロチ、ニヴヒ、ネギダール、ウリチ、トゥングース（エヴェンキ、エヴェン）、ナナイ、ヤクートの 7 民族の代表 30 人（男 27 人）が集まった（カムチャツカからは参加できず）。ガマルニクは彼らが独自に自分たちの生活のことを決めるよう促し学校、病院、協同組合等での協力を申し出た。大会では地区の全権への批判、シャーマニズム、学校建設（現地語を知る教師の少なさ、文字がない等）、アムール沿いの少数民族学校の減少（1912 年の 42 から 9 校へ）、女性の売買禁止、中国人、韓国人との結婚禁止の意見など様々な問題が話し合われた。生活に重大な社会的･経済的問題としてトナカイ飼育、漁業資源の保護、猟と森林の保護、協同組合等についても決定し、極東国立大学で極東の少数民族について研究する必要性についても論じた。今後も大会は開かれると総括したフョードロフはこれが最後の大会になるとは想像で

きなかった。この極東少数民族大会の材料は中央の北方委員会でも活用されることになるが、大会の中心にいたのがガマルニクであった。大会の模様は 1925 年に書籍化され各少数民族に配布された。本大会だけに一章を割いたのも、プリアムール総督らと同様、少数民族に対しても細かい配慮を怠らなかったガマルニクに対する著者の敬意の表れであろう。

第五章。極東の発展計画を検討する中で極東地方の天然資源の状況に関する知識の乏しさを自覚したガマルニクは、1926 年 1 月「極東生産力開発学術会議」の開催を決定した。4 月の会議には地理学協会の 30 人のほか日本の学者も招待され輸送、木材、金や石炭、石油などの鉱物資源について議論した。外貨稼ぎで国に最も貢献していた漁業について日本資本の著しい浸透が問題視された。アルセーニエフは何も持たない人が来ても破綻するだけだと、移住者への総合的な特典付与を主張した。会議の成果は 1926–27 年に 7 巻本として刊行された。1926 年 12 月に東京で開催された太平洋学術会議に参加したソ連極東の学者もソ連極東における研究組織と題してこの会議の成果を報告した。この間、ガマルニクは 1926 年 7 月党の中央委員会総会でスターリンがジノヴィエフ、カーメネフ、トロツキーらの反対派を批判する場面にも遭遇ししていた。

極東地方からの木材、魚、石炭、毛皮の輸出は年々増大した。資源の開発、販売は国営企業が担った。輸出の 3 分の 2 にあたる魚と木材は日本に向かった。しかし輸出の増大を国が期待してもこの地方の希少な労働力のため実行はますます困難になっていった。国家の貿易独占（1923 年 1 月）が密輸に拍車をかけ、20 年代半ばの密貿易は輸入 2,000 万ルーブル、輸出 1950 万ルーブル計約 4,000 万ルーブルで正規ルートを 700 万ルーブル上回り国家に大損害をもたらしていた。密輸を生活手段の一つとみなす国境周辺住民のメンタリティーが問題で、彼らを村ソヴィエトが庇護する場合もあった。1926 年 8 月の極東執行委員会幹部会は 7.7 万人の移住者、2 千人の少数民族を含む 30.7 万人への教育、学校における非識字者の教育（1933 年までに 6.2 万人）など 1932–33 年までの文盲撲滅を計画した。孤児に関しても対策が検討された。著者は、極東執行委員会とその担当部門は教育に関して困難な問題を解決していたと結論づけている。

極東地方には 19 世紀末から 20 世紀初めにかけてチェルニゴフ、ポルタワ、キエフ県から多数のウクライナ人が移住し 1923 年に約 35 万人、人口の約 23% を占めていたが、1926 年に自分をウクライナ人と名乗ったのは約 3 分の 1 の 12 万人にとどまった。1930 年代初めに数千人がウクライナ語で授業を受けていた。諸文献でガマルニクが「ウクライナ化」を目指していたと指摘されるが、それを証明する史料はない〔非ロシア人の言語、文化を発展させる通称「ウクライナ化」への関与を意味しているのではないか？この点で著者の意図は不明確〕。1926 年末には長年の同僚たる極東地方党委書記クビャクが中央に召喚され、ガマルニクにとっては損失となった。1927 年 2 月 18 日にガマルニクは極東地方党委書記に、極東地方執行委員会議長にチュツカーエフが任命された。ここで著者はプリアムール総督と比較してゴンダッチとの共通点の多さを指摘するが、ガマルニクには地元から予算を受け取り、その使用を財務人民委員部に委ねていたこと、行政機関形成の手法を相違点として挙げている。ソヴィエト選挙では選挙人が制限（出身も）されていた。1926 年のハバロフスクでは 3,000 人（人口の 6%）に選挙権はなくその氏名が公示され

ていた。当時農村では大量の選挙不参加運動がみられた。女性にも参政権は付与され多くの大衆が政治参加し、総督府と異なり各レベルの選挙された権力構造が構築されていた。もう一つの特徴は党委員会が監視、統制していた事であり、最後は政治局が全てを決めていた。1920 年代には地方の党組織がソヴィエト内に党フラクションを維持し、「命令」は避けていたが、1920 年代末になるとそれも無くなり、ソヴィエトは労組、コムソモールと並んで党の伝導ベルトとなった。極東では 1920 年代ガマルニクとクビャクの間には相互を尊敬する関係が存在していた。

このころ極東の政治状況について問い合わせたモロトフに対する回答が 1927 年 7 月 6 日のビューロー会議で承認された。：国境警備が弱く、海上はほとんど開かれ、住民にはプロレタリアートが少なく、沿海には富農が存在する。12 万人もの朝鮮人の居住が特徴的で、消費物資の不足が深刻で生産設備もなく、中央からの輸送は困難をきわめる。密輸が大規模で行政的・司法的な手段での統治は不可能である。住民生活の改善傾向も見られるが、鉄道員は住宅がなく不満を抱いている。ソヴィエト選挙からは貧農・中農がソヴィエト寄りだが富農は戦争の噂や満州に居住する白系〔ボリシュヴィキに反対して亡命した人々〕を支持しその影響で活発化していることがうかがえる。インテリ層にも二つあるが総じて極東地方は安定的である。移住問題を解決する必要があるが、1927 年には 4 万人を予定しているものの注目されていない。朝鮮人を国境から移すため軍の強化にも資金が必要である。以上が回答の内容である。

党指導部は中国軍部と白系ロシア人の共同攻撃も想定し、ガマルニクは 1927 年 7 月中央委員会の指示で極東地方党委に「動員委員会」を設置した。満州における反ソ活動が問題となり極東地方党委は党北満委員会と密接に協力した。党北満委員会とソ連の経済機関の関係の悪さ、満州の主要農産物大豆の輸送をめぐる南満州鉄道とウスリー鉄道の間の競合なども問題となった。日本に代表団を派遣する提案に対し 1927 年 9 月、政治局は経済関係者と日本関連の極東国立大学教員の二つを認め、各々 15 人、13 人の代表団メンバーを極東地方党委が決めた。1920–30 年代に極東地方から資本主義国へ送られた唯一の代表団だった。史料館に残されているこの代表団の訪日時の記録の中でアルセーニエフの記録が注目される。日本の満州進出による鉄道建設で中東鉄道が打撃を被り、北満のソ連の影響力が殺がれ朝鮮人が中東鉄道沿線や満州に送りこまれている。150 万の日本人が土地を持たないが、350 万の土地なし朝鮮人が北満やウスリー南部に移ることでその土地を獲得できる。斯様に日本が満州からアムールにまで進出し、ロシア人を太平洋から排除することになる。一方で南サハリンに比べ日本は北サハリンでは形式的・官僚的な対応のため上手く行っていない。アルセーニエフは 2,000 キロの海上国境を警備するのは 1 隻のみだと不安視し、中国人、朝鮮人の制限とヨーロッパからの移住増大を提言した。

その後著者はガマルニク立案の極東発展プラン、彼の人柄、カムチャツカの党委員会との連絡強化、若者との接し方、地元紙の問題等様々な点について触れている。ガマルニクはジガロに 1,200 人の農民のアンケート分析を依頼し、それに基づいて出版された著書（『極東農村の階級分化』ハバロフスク、1928 年）は 1920 年代の極東農村を知るための貴重な史料になった。しかし極東の辞典を作る計画は実現しなかった。シベリア軍管区革命軍事会議のメンバーもガマルニク

はつとめた。1927 年の中央委員選出後、極東を留守にすることが増えていたが、1928 年 8 月 8 日の極東地方党委の会議を最後に中央に呼ばれることになった。

第六章。極東から白ロシアの書記になっていたガマルニクは、1929 年秋の軍事演習の際に陸海軍事人民委員ヴォロシーロフの知己を得た。そしてその推挙にスターリンも同意する形で、1929 年 10 月半ばに軍の政治部長ブブノフ（1924 年〜）の後任に選ばれた。高官としての特権への向き合いかたについて、糖尿病治療に 1.5–2 カ月間オーストリアに送られたガマルニクが 2 週間後、国費を無駄にできないと途中で戻ってきた件、学校に遅れそうになった娘が公用車に乗せてくれるよう頼んだ際、次は早く起床せよと言い残して走り去った件を著者は挙げている。ガマルニクは内戦時の戦友の多いウクライナ軍管区をしばしば訪問していた。新聞を重視し、ほぼ 1 年間軍の機関誌『赤星』の責任編集を務めた。晩年の 1967 年、唯一ガマルニクについてだけ共感をもって回想を残したヴォロシーロフについて触れられている。彼だけがスターリンを君、コバと呼んでいたスターリンの側近中の側近だったが、帝政ロシア軍ではなく実戦で学び、従来の指摘とは異なり技術の重要性もよく理解していた。政治部長として革命軍事会議に出席していたガマルニクを晩年のヴォロシーロフは自身の右腕だったと高く評価した。初めて政治部長と陸海軍事人民委員代理というポストを兼務することが政治局で認められたこともその有能さを物語っていた。この他中央財政局、軍政アカデミー、『赤星』紙、勲章委員会、高等任用資格審査委員会、オゲペウ特別部、軍事検察、最高裁判所軍事参事会などのメンバーを彼は務めていた。ヴォロシーロフ、参謀長エゴーロフともう一人の人民委員代理トゥハチェフスキーの間には緊張関係があり、ヴォロシーロフはその不満をスターリンに述べることもあったが、トゥハチェフスキーとガマルニクは友好関係にあった。1931 年にヴォロシーロフがウラル、シベリア、極東への大視察旅行を敢行した際にガマルニクに宛てた書簡からも、彼に対する大きな信頼と同時にヴォロシーロフの組織能力の高さがわかる。私生活では家族ともども別荘で過ごすことがあった。技術の導入による軍の新しい構成の検討をヴォロシーロフはガマルニクに委ねた。ラジカルに変更する必要はないとの結論は革命軍事会議でも採択され、肯定的な役割を果たしたとみなされている。軍事研究も進展し、1932 年にトゥハチェフスキーが提起した落下傘部隊の投入等、ソ連軍は当時のドイツ軍の戦術を越えていた。1920 年代末から暴力的に推進された農業集団化でトラクターの運用に必要な人材として除隊兵士がコルホーズに毎年多数投入されたが、ガマルニクも集団化への軍の援助について革命軍事会議で報告した。1931 年に軍の党細胞書記を集めた会議でヴォロシーロフは将来の戦争にどう対応すべきか演説し、ガマルニクも扇動活動など党組織の重要性を述べた。1934 年初めの第 17 回党大会でスターリンは独日両国が戦争の源だと述べて極東に初めて注目し、ソ連の前哨たる極東で様々な対策を実施した。

これより前の 1933 年、軍の中央組織に関して参事会方式をスターリンが批判すると、ガマルニクだけが各軍管区と艦隊における軍事評議会の必要性、その解体による軍の弱体化の危険性を指摘して反対したが、結局陸海軍事人民委員部は国防人民委員部に改名され革命軍事会議も廃止された。後にこの決定は誤りだったことが判明する。軍は完全に党の支配下に置かれ、1934–38

年の年末に開催された軍事評議会の速記録が 2000 年代に刊行されている。1934 年 12 月の初回会議では誰もスターリンに言及しなかった。ガマルニクは特に、「この 2 年間極東の諸問題に特に熱心に取り組んだ。日露戦争について書かれたものを多数読んだ。今日の一連の具体的な現実的問題に対する回答をそこから汲み取った」と述べ、第一次大戦、内戦、特に日露戦争の歴史を学ぶ必要性を訴えた。軍内では粛清が進み、1933 年には 22,308 人が追放された（半分は出自、9,000 人は政治的理由）。1934 年 5 月にはガマルニクの関与で、内務人民委員部の特別部が勝手に軍内で尋問する件数は減少した。ハウストフ、サミュエルソンが述べるように 1937 年春まで軍における弾圧は解雇だけで、ここにヴォロシーロフの権威が認められる。1934–36 年にかけて 2.2 万人が解雇された（5,000 人が反対派、1 万人が各種犯罪による）。1935 年には軍の局の再編、新軍管区の導入、帝政時代の称号の復活などが進められた。軍事予算も伸び、常備軍の割合が増え、軍需産業による軍の装備も拡大した。1935 年 12 月の軍事評議会におけるガマルニクの報告にスターリンの発言の引用が増えていることを確認できる。幹部の教育問題、軍隊内の文化・啓蒙活動について、装備の充実が進んだが、質は不十分で事故が多いことが問題視された。民間航空総局長トカチョフが視察した独英仏にも学ぶ点が多いと指摘し、1936 年にはモスクワからハバロフスク、ウラジオストックまでの路線整備を目標にすることとなった。初めて兵站・食糧問題について議論され、内戦に慣れた連中は「弾薬、部品、燃料、装備、食糧、飼料が将来の戦争でもつ意味を分かっていない」とガマルニクはその重要性を指摘した。1936 年 10 月の軍事評議会にガマルニク、ブリュッヘルは極東での演習のため参加していない。この会議でヴォロシーロフが騎兵について初めて言及し、現代の戦争ではとても困難なため騎兵部隊を射撃連隊、機関銃連隊で取り換えるよう提言した。航空部隊についてはスターリンが直接担当しているとも述べている。穏やかな雰囲気で議論は進んだ。

第七章。時間を遡り、極東問題についてガマルニクの果たした役割が考察される。極東にとっては 1929 年の中ソ紛争が警戒を促す最初のシグナルであった。極東に詳しいガマルニクを軍に起用したことは時宜にかなっていた。1930 年 4 月 19 日スターリンに招かれたガマルニクは 2 時間話し合い、極東強化のため極東委員会の委員長に選ばれ、1928 年以来初めて極東へ向かった。第 10 回極東地方党協議会、極東地方党委員会に参加し、極東からの輸出拡大のため中央の課題に基づき一連の決定を採択した。視察や会談を通して極東の諸問題を政治局に報告した。半分以上が日本に向けられる輸出、労働者の不足、半分飢餓状態に置かれている兵士、穀物・肉の不足、除隊兵士で構成される赤軍コルホーズの良好な状態等について報告した。これを受けて政治局は 7 月、輸出計画の完全実施、各人民委員部の極東への協力（木材、漁業、ウラジオストック港の荷物取扱、労働力の供給、赤軍兵士の極東移住、コルホーズ・ソフホーズの開設、諸機関への幹部派遣）を促す決定を採択した。極東に関する情報を得るためスターリンがヴォロシーロフを派遣したが、「ハバロフスクの指導者になぜ輸出できないのかよく聞いてこい」という派遣目的をヴォロシーロフがガマルニクに説明した。次いで、ヴォロシーロフの実際の視察、現地での反応を訪問ルートに沿って分析している。彼の不在中の 1931 年 7 月、対ソ戦争を実行すべきと

の日本の駐在武官の提言が、ソ連当局に傍受されるが、この重要情報を得たスターリンは、「ガマルニクへ！重要だ」と書き込んで送った。その直後の満州事変で、スターリンが抱いていた脅威は現実のものとなった。

その後ソ連は極東で様々な国防策をとったが、ヴォロシーロフがガマルニクに 31 年 12 月に述べたとおり、「スターリンが極東に従事」していた。潜水艦や装甲列車の製造、極東への爆撃機の派遣などスターリン、ヴォロシーロフ、ガマルニクの間で交わされた書簡にも記録が残されている。陸海軍事人民委員代理、組織局メンバー、中央委員会メンバーに、「極東の国防力強化問題に関する党中央委員会、ソヴナルコム委員会委員長」なる肩書が加わった。1935 年を除きガマルニクは毎年数カ月極東での仕事に従事した。ガマルニクの極東視察はしばしばスターリンがイニシアチブをとった。ガマルニクの提案でセメント工場、ガソリンタンクが建設され、道路建設部隊も設立された。1932 年は特にガマルニクにとって困難な 1 年で、アムール川沿いに造船・飛行機工場を建設する任務を課せられた。極東へ大量の物資が輸送された。極東軍内で行われていた粛清に関心を抱き、より慎重な対応を求め、各種建設現場でも話を聞いた。1930–37 年にかけてスターリンの執務室を 56 回訪問し、彼から直接指示を受けていた事がわかる。ガマルニクには極東ソ連軍の戦闘力向上、国境警備の強化、軍需産業の潜在力向上などが課題として課せられていた。極東地方では日本軍との国境付近の紛争が絶えず、どこよりも緊迫していたが、極東が置かれた劣悪な状況を中央も認識していた。1931–32 年の長期出張時、軍の食糧自給の必要性を確信したガマルニクの提案で、1932 年 3 月政治局は特別コルホーズ軍団の設置を決めた。1936 年のウラジオストックのセダンカ給水設備視察で、日本から真水を運んでいた過去と比べ改善を実感した。ただしこれは内務人民委員部のデリバスの指揮下に囚人が建設したもので、帝政時代とやり方に変わりはなく、その規模はソ連時代が圧倒的であった。コムソモリスクにはすでに飛行機工場が建設され 6 万人が居住していた。各地の採炭量も増大し、極東各地で様々な工場が操業を始めていた。軍幹部の妻 3,000 人を集めた全ロシアの会合が 1936 年 12 月にクレムリンで開かれ、いわゆるヘタグーロヴァ運動の実施を決めたが、ガマルニクはこの運動を支援していた。

第八章。1937 年に入ると粛清が本格化する。1 月に部下のピャタコフ、セレブリャコフらが死刑判決を受けると、スターリンの側近の一人オルジョニキッゼが 2 月半ばに自殺した。ガマルニクは娘を葬儀に連れていった。1924 年以来 4.7 万人の将校を解任し、1934–36 年だけで 2.2 万人も解雇していた赤軍の幹部をヴォロシーロフ、ガマルニクはともに肯定的に評価していたが、スターリン、モロトフらの評価は異なっていた。5 月の異様な人事が続いた後、トゥハチェフスキーらの主要な幹部は次々に逮捕され、5 月 30 日の政治局は彼らをドイツ、日本、ポーランドのスパイと認定しガマルニクも解任した。その知らせを受けたガマルニクは翌 31 日に自殺した。6 月 1 日の臨時軍事評議会でヴォロシーロフは軍からならず者を一掃し、昨日人民委員代理の一人が自殺したと報告、スターリンもガマルニクは 1932 年に一味に引き入れられたと断定した。翌 6 月 2 日にはスターリン自身が大演説しドイツやトロツキーとの関係に言及し、ガマルニクを含む 13 人が軍事政治的な陰謀の核にあると述べ、ガマルニクについては特にブリュッヘルの解

任要求を理由にしていた。ガマルニクは一貫して反革命家だったとし、陰謀の不摘発を警戒心の欠如に求め、5% の真実があるならばお互いを密告せよと訴えた。速記録に残された軍高官たちの発言からは皆がショックを受けていた事がわかるが、著者は「彼らが教養の高い、文化的な、道徳的にも礼儀をわきまえた人々」であったとみなしてはいけないと述べている。またスパイと断定された人々がスターリンともたびたび面会していたことが述べられ、彼も微妙な立場に置かれることになった。会議は続行し赤軍内の裏切り的、反革命的ファシスト組織の摘発に関する呼びかけが、軍事評議会の基本的命令として 7 日に署名された。6 月 4 日に母が死ぬが、スターリンは葬儀にも出ずに軍の統制に専念した。この臨時軍事評議会が 1937–38 年の大量粛清発動の鍵となった。1930 年代初頭からの軍の近代化は内戦を戦った軍人には困難で、トゥハチェフスキーらの指導部には限定的な支持しかなく、野心から皆の前でヴォロシーロフを無能とこき下ろす等慎重さに欠けた面があった。一方で 1936 年のヤゴダからエジョフへの内務人民委員交代も少なからぬ影響を与え、エジョフは反トゥハチェフスキーの材料を集め、諸外国も挑発の材料を流していた。スターリンは一貫してトゥハチェフスキーを軍事指導者として高く評価していたが、その他の軍幹部が拷問で強要された自白を信じた可能性がある、と著者は指摘している。著者は 2008 年に出版されたソコロフ、カントールのトゥハチェフスキー伝を評価している。1937 年 6 月 11 日の裁判で処刑が言い渡されたトゥハチェフスキーは当日、自分が西、ガマルニクは東のセンターを担っていたと述べていた。ガマルニクの自殺は臆病さや責任逃れの表れとして非難されたが、逆にトゥハチェフスキー伝の筆者ソコロフはガマルニクに共感し、なぜトゥハチェフスキーが自殺出来なかったのかを問うている。テロルの中で自殺は抗議の手段であったとして、著者は自殺に訴えた人々の名前を列挙している。粛清は妻たちにも及んだ。1938 年 10 月の報告によれば裏切り者の妻たち 18,000 人以上が粛清された。ガマルニクの母や妹も粛清された。軍事評議会メンバー 108 人のうち 1938 年 11 月にメンバーとして残っていたのは 10 名だった。1938 年 11 月の軍事評議会でヴォロシーロフは 40,000 人以上が粛清され、いまや赤軍は忠誠心ある部隊に生まれ変わったと述べた。1937 年には 146 回面会したスターリンとヴォロシーロフに軍の粛清について責任がある。

第九章。カルトヴェリシヴィリはグルジアのクタイシからキエフの大学に入り、1910 年に入党したが、革命時の活動で最も親しかったのがガマルニクであった。彼は 1920 年代にキエフで活動し 1929 年にウクライナの第二書記に就任した。その後 1931 年ザカフカース地方党委書記として活動中、すでに陰謀のマスターとして有名だったベリヤをスターリンが第二書記に任命する案に反発し、西シベリアへ転任した。2 年後の 1933 年、スターリンの指示でラヴレンティエフと改名し極東地方第一書記として赴任した。ガマルニク同様暴力に頼らず人のために仕事をしたカルトヴェリシヴィリの極東における活動を著者は最後に描いている。カルトヴェリシヴィリはガマルニク時代は軍との関係は一体だったと主張、ヴォロシーロフに特にアルコール依存のブリュッヘルに関する否定的情報を流すと同時に沿海軍を独立させるよう要請した。しかし 1936 年末にモスクワの中央委員会でカルトヴェリシヴィリは解任され、翌 1937 年 2 月に逮捕されウ

クライナに連行され、ウクライナをソ連から分離させベリヤに対するテロを計画したと告発された。極東では彼に続いて党指導者の逮捕が続き、カルトヴェリシヴィリも 1938 年 8 月に銃殺された。あとがきで著者は特にスヴォーロフ、ヴェリカーノフ、ミナコフらが最近の著作の中で、軍による体制転覆の陰謀が存在したと述べてスターリンを擁護していると批判し、現在のスターリン復権の動きに対する反発からも本書を執筆したと動機を説明している。

プリアムール総督三部作同様、極東の指導者として大きな役割を果たしたガマルニクに対する著者の共感を読みとれる。ヴォロシーロフに次ぐ軍のナンバーツーであり、その行動の解明はスターリン時代のソ連史、極東史の解明に不可欠だろう。スターリンに盲従する無能な軍人といったヴォロシーロフに対するステレオタイプ的な見方は、スターリン死後の党内闘争の中で生み出された政治的なものであり、改めて事実に即して再評価すべき問題である。トゥハチェフスキー、ジューコフらについての著作は多いが、ガマルニクのみならずヴォロシーロフについても研究が少ない。本書はガマルニクとヴォロシーロフが交わしていた書簡を 1 つの軸にこの時代の軍中央の指導部のあり方、スターリン個人との関係を照らしており重要な視点を提示している。実際の極東における諸政策、中央の革命軍事会議における諸決定も参照しながら、より具体的にガマルニク、ヴォロシーロフの果たした役割について検討する必要があるように思われる。